

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00801

研究課題名(和文)母語話者英語を単一規範としない国際汎用性重視の英語新評価の有効性に関する実証研究

研究課題名(英文) A Study on New Ways of Evaluation from the Perspective of World Englishes that Does Not Use Native Speaker English as a Single Norm

研究代表者

塩澤 正 (Shiozawa, Tadashi)

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：10226095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：従来の「正確性」を重視する評価と「国際的汎用性」重視した評価の違い、課題、そこから得る教育現場への示唆を得ることが本研究の目的である。主にスピーキングとライティングの領域で、様々な観点で確認したところ、パフォーマンスを評価材料にした場合、Holisticな評価であっても、観点別の評価を足し算しても、近い評価結果を得ることができるがわかった。ただし、TOEICなどの正確さを重視したテストと比較すると、相関はそれほど高いものではなかった。教育という観点からは、「国際的汎用性」重視の評価の重要性が確認できた。学習者の「自分らしさを表現すること」への意欲に繋がるようだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「国際英語論」は言語使用の機会の提供に欠ける日本の英語教育には不可欠な考え方であることは多くの研究者や教育者が賛同するところである。だが、「間違ってもいい」「伝えることが大切」という考え方は評価論では受け入れがたいものがある。今回の研究では、国際英語論の観点からの評価は、従来の正確さを基準とする評価と相関が低い分野とほとんど大きくは変わらない分野もあることが判明した。しかし国際英語論の観点からの評価の方が、学習者の動機づけを高め言語活動を促すことに繋がるということが示唆された。しかも、方法論としては様々な方法があることが確認できた。日本の英語教育においては重要な示唆を与えてくれていると言えよう。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to obtain the differences between conventional "accuracy" oriented assessment and "international versatility" oriented assessment, the challenges involved, and the implications for the educational field to be gained from these differences. When we checked various perspectives, mainly in the areas of speaking and writing, we found that when performance is used as the evaluation material, we can obtain close evaluation results, whether Holistic or by adding up the evaluations from different perspectives. However, the correlation was not so high when compared to accuracy-oriented tests such as TOEIC. From an educational perspective, the importance of "international versatility" oriented assessment was confirmed. It seems to be linked to learners' willingness to "express themselves."

研究分野：応用言語学

キーワード：国際英語論 評価 World Englishes ELF

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

「国際英語論」は、現在の英語が、英米を中心とする母語話者英語圏の地域言語としての役割を超えて、多くのESL地域での国内共通語として、また、EFL地域を含めた国際的な共通語として、飛躍的にその重要度を増している現状をどう受け止めるべきか、という関心のもとに1980年代から活発化してきた社会言語学的研究分野である。だが、一つだけ避けられていた研究領域がある。それがこの評価論と国際英語論の関連領域である。世界的に認められたTOEFLやTOEIC試験などでは、文章がどれほど正確に読め、答を減点することによって学習者の英語力を評価してきた。ところが、非ネイティブスピーカーとしては、「全体として意味が取れる取れることに意義がある」「リスニング試験にインド訛りの英語を取り入れても問題ない」「短い正確な文よりも、誤りが多いが情報量の多い文章の方が価値がある」「民族性の強い表現も評価すべき」とする国際英語論の発想では、このような試験は成り立たない。評価のポイントとしての国際的汎用性 (Intelligibility) や国際的コミュニケーション能力 (Communicative capability) を理論的に提示した研究 (Jenkins 2014, McNamara 2014, Widdowson 2015など) はあるが、具体的にテストとしてどのような観点からどのように扱えばいいかという実践的提案まで至っていないのが現状である。この評価論における理論から実践までの橋渡しをするのが本研究である。

### 2. 研究の目的

日本人は日本的な英語を話すことが自然であり、むしろ理想であるとする「国際英語論」の考え方は、日本でも比較的受け入れられるようになった。母語話者のように話す必要がなければ、学習者のanxietyが減り、outputやinteractionが増え、教育的にも有効であろう。だが、問題は教員側の評価である。ここでは、「正確さ」より「流暢さ」、「複雑さ」より「理解しやすさ」を高く評価すべきであるという考え方が成り立つ。しかし、これは従来の評価論の基本を根底から覆すものであり、学校教育においては受け入れ難い側面がある。これをどのように解決したらいいのだろうか。

本研究はこのジレンマに正面から取り組み、国際英語論に於ける最も重要な評価基準である「国際的汎用性」を評価の中心に置いた場合の課題とその英語新評価基準の可能性を、具体的に提案するものである。

### 3. 研究の方法

大きく3つの研究を行った。

1) 従来の評価と汎用性重視の評価の相関を図る。

#### ①口頭面接と TOEIC スコアの相関

スピーキングの調査対象材料として、中部地区の大学に所属する英語を専攻する2年生35名(グループA)に英語検定2級で使用する教材で模擬面接(汎用性重視のテストのサンプル)を受けてもらい、全てのセクションを録音し、4人の英語上級話者に評価してもらい、30点満点で評価した。また、面接の最も長い発話である絵の説明セクションを使い、流暢性と文法・正確さ、発音を評価した。その上で、被検者全員のTOEIC試験(観点別テストのサンプル)の結果と英検の総合点と流暢性の相関を測った。

#### ②1分間即興発話の理解度と文法・正確さ、発音の間の相関

付随的な実験として、同じ大学の3、4年生18名(グループB)に「将来田舎に住みたいか、都会に住みたいか」という題材で1分間のスピーチをしてもらい録音した。これを、理解度(汎用性重視の評価)、文法・正確さ(観点別評価)、発音(観点別評価)、表現の難易度の4つの観点で、1)と同じ4人の英語上級話者に7点満点で評価してもらいその平均を取った。そして、理解度(汎用性重視の評価)と文法・正確さ(観点別評価)と発音(観点別評価)の間に相関を測った。

#### ③ エッセイライティングの理解度と文法・正確さの間の相関

中部地区の2つの別々の大学の英語専攻の学生30人(2、3年生)に、2)と同じ話題で10分間でエッセイを書いてもらった(グループC)。その理解度(汎用性重視の評価)、文法・正確さ(観点別評価)と表現の難易度の3つの観点で、上と同じ4人の英語上級話者に7点満点で評価してもらいその平均を取った。そして、理解度(汎用性重視の評価)と文法・正確さ(観点別評価)と表現の難易度の間に相関を測った。

### 2) 日本人英語に関する二つの評価視点の比較研究

本研究では、日本人の英語エッセイに対して評価視点の相違により受容性の異なる2種類の評価が生じること、また国際汎用性に基づく英語評価が日本人英語の特徴を肯定する評価となることを確認する。具体的には日英語の言語特徴の相違が日本人大学生の英語 writing にも反映しているかどうか、それはどのように評価に影響をおぼぼすか。英文エッセイの添削のコメント内容の相違点を比較分析する。ここから国際汎用性の視点から見て「肯定されうる」日本人英語の語用論的特徴の抽出をめざす。

### 3) 「異文化理解力」の評価を加えることは可能か

実際の異文化間コミュニケーションで重要な「異文化理解力」は「テストの点数」や「予習の意欲」に関して相関があるのか、あるとすればどの程度かをアンケート調査する。具体的には「テストの点数」と「予習の意欲」の相関をとる。ICC を高めるために、教材と評価の再考が必要であるか確認する。

## 4. 研究成果

### 1) の結果

「国際汎用性重視の英語評価」と従来の「減点法を基本とする観点項目別の評価の総合点」に関しては、項目別評価テストの典型である TOEIC の総合点と 2 つの口頭でのパフォーマンスの理解度（汎用性重視の評価）の相関は、それぞれ  $r=.65$ 、 $r=.66$  で正の相関を示した。同じ被検者の英語力のテストでありながら、その相関があるものの、この程度の相関であるということは、観点項目別の評価と汎用性を重視した評価では部分的には別のものを図っている可能性があることが示唆される。

ただ、即興スピーチの総合的な理解度と、そのスピーチを用いて評価した文法力+発音+表現の複雑さの合計得点とは、高い相関 ( $r=.96$ ) が示された。同じパフォーマンスを評価材料にした場合、Holistic な評価であっても、観点別の評価を足し算しても、同じような評価を得ることができるということであろうか。これはエッセイの評価に関して同じことが言える。今回の調査で、汎用性重視の評価（理解度）と文法、理解度と表現の複雑さの間の相関はそれぞれ  $r=.78$ 、 $r=.68$  と強い正の相関、あるいは正の相関を示している。意外であったのはエッセイにおいて、その情報量（単語数）と汎用性重視の評価（理解度）は相当高い相関があるのではないかと予想していたが、 $r=.55$  であった。相手に理解してもらうためには、たどたどしくも多くの情報を提供することが重要であると考えたが、この予想は外れたようだ。

小さな 3 つの調査であり、方法論のあいまいさや被検者も少ないことから、この調査の信ぴょう性にはやや疑問が残る。また結果の背景や理由を十分に説明しきれていない。ただ、今回の調査では、従来の観点別評価と汎用性重視の評価は相関はあるが、別のものを図っているという可能性も示唆されたことは意義があるかもしれない。

### 2) の結果

本研究では、日本人の英語エッセイに対して評価視点の相違により受容性の異なる 2 種類の評価が生じること、国際汎用性に基づく英語評価が日本人英語の特徴を肯定する評価となることを確認した。日英語の言語特徴の相違が日本人大学生の英語 writing にも反映し、日米の添削者によって評価が異なった。国際英語論を反映した指導法としては、モダリティ表現の多用や be 動詞構文の多用などが日本人英語の特徴であることを指導するとともに、日本的感性を肯定する作文・文法・語法指導を通して「writing への不安を乗り越えて」「読み手に伝わること」「自分らしさを表現すること」「書き慣れること」を重視する評価法が初級・中級段階の短大生を対象とする英作文指導においても有効性を持つことを確認した。

### 3) の結果

国際英語論の視点から英語の評価に関して、従来の 4 技能に加え、「異文化理解力」が重要であり、これを評価を加えることを提案した。アンケート調査から「異文化理解

力」は「テストの点数」や「予習の意欲」に関してほとんど相関がないという結果を得た。また、「テストの点数」と「予習の意欲」には弱い正の相関があるという結果を得た。これらの結果からテストの点数が高くても、「異文化理解力」を必要とする実際のコミュニケーションがうまくいくとは限らないので、ICCを高めるために、教材と評価の再考が必要であるという結論に達した。教育的には、日本語との形式的スキーマの相違と日本文化との文化的スキーマの相違を認識し、文章全体から書き手の意図を理解する解釈的理解をうながし、能動的な活動の必要性が示唆された。

#### 結果のまとめ

従来の「正確性」を重視する評価と「国際的汎用性」重視した評価の違い、課題、そこから得る教育現場への示唆を得ることが本研究の目的である。スピーキングとライティングの領域は、パフォーマンスを評価材料にした場合、Holisticな評価であっても、観点別の評価を足し算しても、近い評価結果を得ることができるがわかった。ただし、TOEICなどの正確さを重視したテストと比較すると、相関はそれほど高いものではなかった。教育という観点からは、「国際的汎用性」重視の評価の重要性が確認できた。学習者の「自分らしさを表現すること」への意欲に繋がるようだ。

興味深いのは、口頭でもライティングでも、汎用性重視の評価の方が文法・正確さや表現の複雑さの評価よりも平均して高いということである。理解できたと聞き手や読み手が感じたときには、比較的高く評価する傾向があるのかもしれない。評価者らとのデブリーフィングで出てきたことは、発話に関しては発音より語彙の大きさが汎用性に大きな影響を与えるのではないかという点である。反対に、エッセイに関しては、語彙より文法力や表現の豊かさが直接、汎用性に関係してくるかもしれない。

日本語と日本文化に影響を受けた日本英語変種を母語話者英語の規範で評価すれば低評価になるのは必然である。日本英語変種の中に存在する日本語と日本文化の影響を受けた特徴を「国際的汎用性」の視点で見極め評価に加える視座が必要であろう。

いずれにしても、「国際的汎用性」重視した評価は、日常的なパフォーマンステストにおいては、十分可能であることが示唆されたと言えよう。具体的な方法としては、アウトプットにおいては、できたことを評価する方法、自分らしさや日本人らしさを評価する方法、holisticに汎用性があるかどうかを評価する方法、満点から引くのではなく、加算方式で上限のない基準で評価する方法、またインプットにおいては、総合的に理解できたことを評価する方法、7.8割理解できたことを十分と評価する方法、異文化の視点の理解を加算点とする方法などが可能であることが確認できた。また、これらは、TOEICなどの標準化された言語運用能力テストとは相関は高くないが、一定程度あることがわかった。だが、国際英語論の視点からの評価の方が、教育的観点からその後のパフォーマンスを上げると言う意味で有効であることが示唆されたと言える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 塩澤正	4. 巻 21
2. 論文標題 「新型コロナウイルス対応に見るアメリカ文化 オハイオ大学でのサバティカルを振り返って-」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部大学教育研究	6. 最初と最後の頁 97-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 塩澤正	4. 巻 20
2. 論文標題 新型コロナウイルス対応にみるアメリカ人的思考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Glocal	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小宮富子、岡戸浩子、河原俊昭、石川由香、榎木園鉄也、吉川寛	4. 巻 19
2. 論文標題 Diversity & Inclusionをめぐる大学英語教育の課題と実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JACET中部支部紀要	6. 最初と最後の頁 77-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 倉橋洋子	4. 巻 6
2. 論文標題 ホーソンとロングフェロー 共栄の関係性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共生文化研究	6. 最初と最後の頁 47-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩澤正	4. 巻 18
2. 論文標題 LMSとLINEを利用したアウトプット重視のオンデマンド型遠隔授業の実践 - 「国際英語論」の発想を利用して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JACET中部支部紀要	6. 最初と最後の頁 87-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 塩澤正	4. 巻 45
2. 論文標題 英語学習「疑似初心者(false beginners)」が抱える課題 人的要因、教育環境的要因、社会的要因から探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 67-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小宮富子	4. 巻 18
2. 論文標題 I thinkの多用に見る日本語モダリティの日本人英語への影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JACET中部支部紀要	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 塩澤正	4. 巻 22
2. 論文標題 「国際英語論」からの日本の英語教育への示唆 - Model of "My English" からの提案 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア英語研究	6. 最初と最後の頁 13-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 塩澤正	4. 巻 43
2. 論文標題 「国際英語論」に基づく英語学習モデルの提案	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部大学人文学部研究論集	6. 最初と最後の頁 107-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳朋宏、三上仁志、塩澤正、Gregory King	4. 巻 18
2. 論文標題 A satisfaction survey on the Multi-Media Room of the Department of English Language and Culture : A learners' view	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中部大学教育研究	6. 最初と最後の頁 125-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩澤正	4. 巻 48
2. 論文標題 「国際英語論」が日本の英語教育に及ぼす影響 -その仕組みと課題-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部大学人文学部研究論集	6. 最初と最後の頁 113-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川有香 小宮富子	4. 巻 5
2. 論文標題 学術論文テキストにおける日本人著者の自己言及の使用 アカデミック・ライティングにおけるwe代名詞指導の課題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 JAAL in Jacet Proceedings	6. 最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 塩澤正	4. 巻 49
2. 論文標題 「国際英語論」への批判に答える 3つの「国際英語論」の教育的意義と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部大学人文学部研究論集	6. 最初と最後の頁 99-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計30件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 16件)

1. 発表者名 塩澤正
2. 発表標題 正確さ重視と汎用性重視の評価の関係 国際英語論の視点からの評価を考えるー
3. 学会等名 JACET中部支部春季定例研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小宮富子、岡戸浩子、河原俊昭、石川有香、榎木園鉄也、吉川寛
2. 発表標題 英語教育とDIVERSITY & INCLUSION - 多様性を包摂した新しい英語教育への提言
3. 学会等名 第60回JACET国際大会 (オンライン) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hitoshi Mikami & *Tadashi Shiozawa
2. 発表標題 Problematic strategies in extensive reading practice: Assessment and future directions
3. 学会等名 RELC (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩澤正
2. 発表標題 音声付きスライドとLINEを利用した講義と英語学習ハイブリッド授業の実践－言語習得論と国際英語論の観点から－
3. 学会等名 大学英語教育学会第35回中部支部大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩澤正
2. 発表標題 正確さ重視の評価と汎用性重視の評価の関係 - 「国際英語論」の視点からの評価を考える -
3. 学会等名 JACET中部支部春季定例研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 倉橋洋子
2. 発表標題 異文化理解力と英語科目の評価
3. 学会等名 JAAL in JACET
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 倉橋洋子
2. 発表標題 Get by in English Series: Fresh Insights
3. 学会等名 The JACET 35th (2020) Chubu Chapter Annual Convention
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉川寛
2. 発表標題 DALP model による英語変種の評価
3. 学会等名 JAAL in JACET
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩澤正
2. 発表標題 汎用性重視の評価の実践 - 学習者の視点 -
3. 学会等名 JAAL in JACET
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小宮富子
2. 発表標題 日本語モダリティを反映する日本人英語の特徴と評価
3. 学会等名 JAAL in JACET
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉川寛
2. 発表標題 日本の多言語社会化で生じる問題と英語の役割
3. 学会等名 JACET中部支部春季定例研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mikami Hitoshi & *Tadashi Shiozawa
2. 発表標題 Initial advantage and achievement in L2 reading: Does the Matthew effect operate in language major contexts?
3. 学会等名 ARWA Conference 2020, Beijing, China. (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小宮富子
2. 発表標題 Society 5.0 時代の多文化共生と英語教育
3. 学会等名 中部支部秋季定例研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小宮富子
2. 発表標題 日英語比較を通して見えてくるもの
3. 学会等名 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学令和2年度研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塩澤正
2. 発表標題 「国際英語論」の視点からの日本の英語教育への示唆 - 理論から実践・評価へ -
3. 学会等名 日本アジア英語学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塩澤正 小宮富子
2. 発表標題 Symposium: English Education for Generation Z and Beyond
3. 学会等名 大学英語教育学会58回国際大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉川寛、小宮富子、倉橋洋子、塩澤正
2. 発表標題 On World Englishes and Cross-cultural Understanding
3. 学会等名 大学英語教育学会58回国際大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉川寛、小宮富子、倉橋洋子、塩澤正
2. 発表標題 国際英語と評価
3. 学会等名 JAAL in JACET（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉川寛、小宮富子、倉橋洋子、塩澤正
2. 発表標題 汎用性重視の評価と観点別評価との関係- SpeakingとWritingを中心に-
3. 学会等名 AAL in JACET（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 倉橋洋子
2. 発表標題 Intercultural Communicative Competence and the Evaluation of English Ability
3. 学会等名 大学英語教育学会58回国際大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉川寛、小宮富子、塩澤正、倉橋洋子、下内充
2. 発表標題 英語多変種との接触が学習者の英語観に与える影響
3. 学会等名 JAAL in JACET（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉川寛、倉橋洋子、小宮富子、塩澤正、下内充、榎木園鉄也
2. 発表標題 国際理解と異文化理解研究会の研究報告
3. 学会等名 JAAL in JACET（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 倉橋洋子
2. 発表標題 How a Short-term Study abroad Program Is Helpful for Intercultural Competence
3. 学会等名 The 11th International Conference of English as a Lingua Franca（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tadashi Shiozawa, Hitoshi Mikami
2. 発表標題 Immediate and Sustained Effects of Semester Abroad Experience on Target Language Reading Proficiency: A Longitudinal Study
3. 学会等名 AAAL (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小宮富子、吉川寛、石川有香
2. 発表標題 Modality Expressions in Japanese English Reassessed from the viewpoint of English as a Lingua Franca
3. 学会等名 The 2nd International Conference of Bilingualism (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小宮富子、榎木蘭鉄也、石川有香、河原俊昭、岡戸浩子、吉川寛
2. 発表標題 大学生の多文化共生意識に関する量的および質的研究
3. 学会等名 第5回JAAL in JACET学術交流会 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小宮富子
2. 発表標題 英文法・語法の面白さ
3. 学会等名 岡崎女子大・岡崎女子短期大学 研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石川有香 小宮富子
2. 発表標題 学術論文テキストにおける日本人著者の自己参照の使用 大学でのアカデミック・ライティング指導における課題
3. 学会等名 第5回JAAL in JACET学術交流会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomiko Komiya
2. 発表標題 Teaching English Grammar and Usage with GELT framework
3. 学会等名 The 42nd Thai TESOL; Bangkok, Thailand（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 倉橋洋子 伊藤淑子 樋口晶子
2. 発表標題 "My Kinsman, Major Molineux" 再読 Robinはshrewdか
3. 学会等名 日本ナサニエル・ホーソン教会中部支部研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 NUTT, Julyan , MARSHALL, Michael *KURAHASHI, Yoko, MIYATA, Manabu	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 98
3. 書名 コミュニケーションのための実践英語3 [ 準中級編 ]	



1. 著者名 NUTT, Julyan , MARSHALL, Michael *KURAHASHI, Yoko, MIYATA, Manabu	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 95
3. 書名 コミュニケーションのための実践英語4 [ 中級編 ]	

1. 著者名 アレン玉井光江、醍醐路子、飯田敦史、伊東弥香、伊藤泰子、ケイト・エルウッド、菊池尚代、木村松雄、木塚雅貴、松本佳穂子、宮本智明、佐野富士子、下山幸成、塩澤 正、高田智子、竹蓋順子、寺内一、辻るりこ、山口高領、山崎 勝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 301
3. 書名 新しい時代の英語科教育法	

1. 著者名 Julyan Nutt, Michael Marshall, 倉橋洋子, 宮田学	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 114
3. 書名 コミュニケーションのための実践英語 1	

1. 著者名 新田満 倉橋洋子 小田敦子 伊藤淑子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 272
3. 書名 19世紀アメリカ作家とエコノミー国家・家庭・親密な圏域	

1. 著者名 塩澤正 アダム・マーティネリ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 112
3. 書名 Activator Next	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	倉橋 洋子 (Kurahashi Yoko) (10082372)	東海学園大学・経営学部・教授  (33929)	
研究分担者	小宮 富子 (Komiya Tomiko) (40205513)	岡崎女子短期大学・現代ビジネス学科・教授  (33943)	
研究分担者	吉川 寛 (Yoshikawa Hiroshi) (90301639)	中京大学・公私立大学の部局等・準所員  (33908)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------